

Title	巖復私論：翻訳論と文芸観よりみて
Sub Title	On Yān Fu
Author	岡本, 宏(Okamoto, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

嚴復私論

——翻訳論と文芸觀よりみて——

岡 本 宏

一

嚴復は、中国が日清戦争（一八九四年）に敗れ去り、その結果として深刻な民族的危機意識が澎湃と興つて来た時期、即ち一八九五年、天津の「直報」紙上に一連の論文、「論世變之亟」「原強」「救亡決論」「闢韓」の四編を發表し、四十才を過ぎて始めて清末の改良主義運動の流れの中に立現われて来るのである。続いて彼は更に數編の論文及び上奏文⁽²⁾などを發表しつつ、ハックスレーの「天演論」を皮切りに、以後約十年間、西欧近代の啓蒙思想家の著作を陸續と翻訳する仕事に没頭した。嚴復はこれらの論文及び翻訳を通して、中国が弱國に陥つた原因を、政治体制、社会機構、學問思想等凡ゆる分野から追究し、翻つて西欧の政治、經濟、社会体制及び思想の性質を、中国のそれと比較検討する形で紹介し、わけても自由の思想と科學的精神を強調しつつ、論理學の移植には最大の努力を払つたのであつた。同時にこれらは所謂「中學爲體、西學爲用」という洋務運動の否定であり、特に彼の訳著は魯迅や「新青年」グループの人達の思想形成にも——たとえ新文化運動の旗手達に、その西欧思想受容の態度、發想、方法などが否定、批判の対象とされたにし

ても、そのこと自体に於て——直接、間接に大きな影響を与えている。⁽³⁾

かくして嚴復は、中国に於て始めて西欧思想を組織的に紹介した出色の啓蒙家として、その名を歴史に遺すのであるが、この時期に至るまで、彼には長い不遇の時代があった。

清朝初のイギリス留学生として、二十四才（一八七七年）から二年間、ポーツマス大学院、グリニッチ海軍大学に学びながら、早くから海軍の将星になる望みなど持たなかった彼は、他の学生が軍艦上で実習をしている間、一人、アダム・スミス、モンテスキュー、ダーウィン、ハックスレー、スペンサー、ベンサム、ジョン・ミルなどの著述に読み耽り、又暇をみては、イギリス社会の状況を観察し、更にフランスに足を伸ばすなど、独自の行動をとっていた、ということである。⁽⁴⁾

だが、多くの新知識を得て帰国した彼には、李鴻章が天津に創設した北洋水師学堂の教務長（十年後に校長）という地位が用意され、たに過ぎなかった。以後、約二十年間、彼はこゝに暮らすのである。その新知識を活用するには、これは余りにも低い役職である。當時の中国は、留学生が帰国しても、その学問と経験を活かすことができなかったものであり、それは同時に洋務運動の限界を示すものでもある。

一八六〇年代より、曾国藩、李鴻章、左宗棠、張之洞ら漢人官僚を中心として推進されて来た洋務運動については、梁啓超も「戊戌政変記」の第三編「政変前記」に次のようにその実態を暴露している。「我が支那同治より後の所謂変法は、練兵も、開礦も、通商も、交渉の総署使館有るも、教育の同文方言館及び各中西学堂有るも、皆曠昔の人の所謂改革の若きものなり。——夫れ練兵を以て之を論ずれば、将帥は学校より出でざれば、能く兵を知らんや。選兵は度るなく、任意招募なれば半ば流巧に属し、体の羸壯は知らざるところ、字を識るか否かは計らざるところなれば、能く命を用ひんや。——開礦を以て之を論ずれば、礦務学堂興らず、礦師乏絶し、金を重ねて西人を延聘するに尚ほ信すべからず。——交渉を以て之を論ずれば、總理衙門の老翁十数人、日に堂皇に坐し、外国の名すら知らず、國際に論なく、己国の条約すら未だ寓目せず。——教育を以て之を論ずれば、学堂有りて学堂なきが如く、且つ学堂の中、德育を事とせず、愛國を講せず。故に堂中の生徒、但だ欧西下等人の惡風に染むのみ。」

これが大体洋務運動の実情であろう。これについては、王韜や鄭觀應、何啓なども、それ／＼著作のうちに言及しており、たとえば太平天国にいたこともある王韜は「上當路論時務書」の中で、洋務派は、「能く民の禍を爲し而して民の福を爲す能はず、能く民の害を爲し而して民の利を爲す能はず。」とまで批判している。

当然、嚴復は不満であった。「当年誤習旁行書、举世相視如鬻盜。」と、後年回想するような状態に在った彼は、「四十不官擁臬比、男兒懷抱誰人知。」⁽⁵⁾として、その間官界に打って出んものとして、屢々福建や北京の郷試に挑んだが、全て失敗した。洋務派に重用されず、官吏への道も閉ざされ、多くの新知識を有しながらそれを顧みずこともならず、青年期に古典的教養を受け、散文家としても一廉の才有り⁽⁶⁾と自負しても、それを示す機会には恵まれなかった。

一八九五年、嚴復が発表した前記四編の論文に、こうした不遇の時代の鬱勃たる心情と、中仏戦争に敗れて十年、今亦日本との戦いにも敗退し、亡国の危機に際会した中國の現状に対する深い憂国の情とが溢れているのも蓋し当然であろう。

朝野の腐敗を嘆き、民力・民智・民徳の改革向上をとえ、洋務運動を批判し、民の自利・自由・自治を説き、西欧の科学的精神を強調し（「原強」）、韓愈の「原道」批判に事よせて君主專制政治の害を暴き、一種の民約論的主張を展開し（「闢韓」）、八股文を否定し、中国學術の流れを概観するなかで、「陸王の学」⁽⁶⁾を排撃し、併せ、詞章を空んずることを以て學問とするような知識人の勉學態度を拒否し（「救亡決論」）、歴史を動かすものは、少数の人間の力でなく、それは歴史の必然の流れ、即ち「運會」というものである、と説いて頑固派を攻撃する（「論世變之亟」）。就中、「闢韓」は、年來の知己張之洞がこれを駁撃する一文を草するなどの反響を招いたが、この論文が内容的にはともかく、時期的には譚嗣同よりも先立って清末に於て始めて君主制を大胆に批判した点からすれば、画期的な文章と云えよう。

しかしながら、これら四編及び上奏文・書簡文を含めて、その後⁽⁷⁾に公けにされた幾編かの論文の及ぼした政治的・思想的影響力は、彼の行なった翻訳のそれに比べれば浅いものであった。これは、康有為・梁啓超・譚嗣同等の人々が、同時代に在って展開した独自の思想に比べると嚴復の思想にはそれらをこえるだけのものがなかったこと、又変法運動の最中に在っても直接的な政治行動をとら

ず、後の革命派の動きには、はっきりと批判者の立場に身を置いただけに急進的な人々の心をとらえる魅力がなかったことなどに依るものである。中国に於ては政治的行動性が、人物評価の一つの規準になる。

敵復の果たした歴史的な業績は、やはり翻訳紹介の面にこそあると云えよう。

二

四編の論文を発表してから間もなく、具体的には一八九七年「中俄交誼論」⁽⁹⁾を書いた前後から、敵復の思想は次第に折衷主義に傾き戊戌政変後には寧ろ保守的な傾向さえ示していた。これは「上今上皇帝万言書」(一八九八)、「与外交報主人論教育書」(一九〇二)、などの文、又「羣学肄言」(一九〇三)、「羣己權界論」(一九〇三)、「社会通詮」(一九〇四)、「孟德斯鳩法意」等の訳者序及び列伝などの諸文に明らかなるところであり、蔡元培も「五十年来中国之哲学」の中で、これに言及している。⁽¹⁰⁾

彼が、啓蒙思想家として、その出発時に於て、一面かなり急進的な考えを述べながら、總て後退して行つたのは何故か。——これについては、現在未だ充分に論証する用意がないので、二、三の問題点のみ指摘しておく。そも／＼四編の論文も詳細に検討すると、急進的な傾向と保守的要素とが混在しており、其の後に於て後者が引き出されてくるのであるが、これは一つには、彼が本質的には漸進的改革論者であつて、例えば「關韓」に於てさえも、現在只今の時点で、直ちに君臣の關係を破棄するのは時期尚早なりとし、又前記「中俄交誼論」に於て、「夫れ君權の輕重は、民智の深淺と正比例を成す。論者動もすれば中国宜しく君權を減じ、議院を興こすべしと云ふ、嗟呼／＼今日民智未だ開かざるの中国を以て、而して泰西君民并王の美治に効はんと欲するは、是れ大乱の道なり。」⁽¹²⁾と述べていることなど、それを示していよう。又、九七年当時、梁啓超に宛てた書狀に於て「一たび甲を変へんと思はゞ即ち須く乙を変ふべし。乙を変へんと欲するに至りては又須く丙を変ふべし。」⁽¹³⁾と云っていることなど、頑固派、洋務派、変法派などが入り乱れていた当時の状況に迷わされていたとも考えられるし、現実に政治運動の経験を持たなかつただけに、観念的になりがちであつたとも云える。これらのことは、不遇の時代が長かつただけに、それが逆作用していたのではないか、重みを痛感しただけに、急進的に、ましてや樂觀的

には、到底なれなかったのではないか、と考えられる。勿論、戊戌政変の影響も見逃がすことはできない。逮捕すらされなかったが、義和団の乱で倉皇として天津を脱出する迄、その生活は監視されていた。政変の犠牲となつたいわゆる戊戌六君子を悼み、「戊戌八月感事⁽¹⁴⁾」と題して、沈痛な心情を詠った詩を遺している。

以上述べた諸点の総和が、彼をして翻訳の仕事に没頭せしめた要因の一つとして考えられるのである。たゞ、それは消極的な受身の形で始められたのではなく、そこに自分の進む方向を見出そうとした、云わば自己の存在を賭けた形でなされただけに気魄がこもっており、同時にそれが彼の翻訳に対する厳正な態度となつて表われていると思う。

嚴復が翻訳に對した基本的な態度は如何なるものであったか。先ず、テキストの選定はアト・ランダムでなく、嚴格にして且つ系統立ったものであった。彼は中国の現状に於て、どのようなものを翻訳紹介することが必要か、という点にその選定の規準を置いたのである。即ち概括すれば、

一、国家富強の原理として作用するもの。

二、學問、思想の原理となるもの。

三、中国の歴史と傳統思想を再評價するに役立つもの。

以上の諸点であつたと考えられる。訳著に即して云えば、亡国の危機に際会し、いわゆる「物競天折、適者生存」の法則を説いて知識人の覺醒を促す爲に「天演論」(Evolution and Ethics and other Essays : T. H. Huxley)。「夫れ計學は切して之を言はゞ、則ち中国の貧富に關し、遠くして之を論すれば、則ち黃種の盛衰に係る。故に不佞毎にスミスの言を見て時事に於て関合するもの有り、或は己が意に於て根柢する所有り。」とて「原富」(An Inquiry into Nature and Causes of the Wealth of Nations : Adam Smith)。「羣學⁽¹⁵⁾」は何ぞや。科學の律令を用ひて民羣の變端を察し、以て既往を明らかにし、方に來らんとするを測るなり。」として「羣學肄言」(The Study of Sociology : H. Spencer)。「十年の間、吾國の西政を考ふるもの日に益々衆し、是に於て自繇の説、常に士大夫に聞く。願ふに竺⁽¹⁶⁾だ旧きもの、既に其の言を驚怖し、目して洪水猛獸の邪説となし、新を喜ぶものは、又恣肆泛濫」するから「學者必ず己と羣との

権界を明らかにして而る後に自蘇の説乃ち用ふべきのみ。」⁽¹⁷⁾として「羣己権界論」(On Liberty : J. S. Mill)。E・ジャンクスの学説に拠って、社会發展の段階を詳説する為に「社会通詮」(A History of Politics : E. Jenks)。「凡そ古今人事得失の林、経緯百為、始終条理、五洲礼俗政教に于て、其の前因を籀し、其の後果を指さるはなし。」⁽¹⁸⁾として「法意」(L'esprit des Lois : C. L. S. Montesquieu)。「是の学は一切の法の法、一切の学の学たり。」⁽¹⁹⁾として、具体的には「陸王学」批判の拠り所になるものとして「穆勒名学」(System of Logic : J. S. Mill)をそれ／＼選んだのである。

扱て、原典を選ぶ規準が定まったにしても、翻訳の問題は、これだけでは解決しない。翻訳に際し、具体的には如何なる方法に拠るか、どのような階層の人々を対象にして訳すか、どんな文体を用いるか、訳文そのものの規準は如何にあるべきか等の問題が出てくる。

三

一九〇二年、嚴復訳の「原富」が出版された時、梁啓超は早速「新民叢報」第一号紙上にそれを紹介、「嚴氏中学西学に於て、皆我國第一流の人物たり、此の書復た数年の心力を經、屢々其の稿を易へ、然る後に世に出づ。其の精美なること更に何ぞ言を待たん。」と称賛した。しかしながら、彼はそれに續けて嚴復の訳文が難解であつて、古典文に習熟した人でなくては理解できない点を批判して次のように述べている。「吾輩の猶憶み有りとする所のものは、其の文章太だ淵雅を務め、意を刻して先秦の文体を摹倣し、多く古書を読む人にあらざれば、一たび繙くも殆ど索解し難し。夫れ文界の宜しく革命すべきこと久し。欧美日本諸国文体の变化、常に其の文明の程度と正比例を成す。——況や此等学理邊蹟の書、流暢鋭達の筆を以て之を行なふにあらざれば安ぞ能く学童をして其の益を受けしめんや？ 著訳の業、將に以て文明思想を国民に播せんとするなり、藏山不朽の名譽を為すにあらざるなり。文人の結習は、吾賢者の為に諱む能はず。」

これに対して嚴復は如何に応えたか。彼は「与新民叢報記者論記事書」⁽²⁰⁾に於て、「窃かに以謂く、文辞は理想を載する羽翼にして而

して情感を達するの音声なり。是れ故に理の精なるものは、載するに粗獷の詞を以てする能はず、而して情の正なるものは達するに鄙倍の氣を以てするべからず。中国文の美なるもの司馬遷、韓愈に若くなし。——僕の文に關しては淵雅を務むるにあらざるなり。其の是を務むるのみ。且つ執事既に文体の變化は時代の文明の程度とは比例を為すを知れり。而して其の中国學術を論ずるや、又戰國隋唐、全盛に達し放大大光明の世を為せりと謂ふ。則ち直用の文体、二代を捨て、其れ又誰にか属せん。且つ文界復た何の革命か之れ有らん。——夫の翻訳の文体の若きは、其れ中国に在りては、則ち誠に古謂ふ所に異なるもの有り。仏氏の書是れのみ。然して必ず先ず之が律令名義を為し、而る後に以て人を諭すべし。設し今の訳人、未だ律令名義を為さず、闕然として西文の法に循ひて之を為さば、其の書を読むもの乃ち悉く解せんや、殆ど然らざるなり。徒だ近俗の辭を為し、以て便を市井鄉僻の不學にとるが若きは、比れ文界に於ては陵遅にして、革命にあらざるなり。且つ不佞の從事せし所のものは、學理邊蹟の書なり。以て學童に餉つて其の益を受くるを望むにあらざるなり、吾が訳は正に以て中国の古書を多読せし人を待つ。」と、明快に云い切つて反論した。

俗語を退け、あく迄文言を尊重していること。知識人を対象にしていること。翻訳のあり方についての見解。以上の三点に問題が集約される。そも、例えて言うならば、嚴復は福沢論吉型の啓蒙家ではなかった。福沢は常に民衆を念頭に置いていた。覺醒を促せば、彼等は自分の意図する方向へついて来るといふ自信があった。そのついて来る者のうちから、優れた人間を選び出し、新しい型の知識人に育てゝいこうとした。だが、それには自分の意図する所を広く且つ有効に人々に伝える為の方法・手段を案出しなければならぬ。学校を設立し、講演会を開き、新聞・雑誌の發行に尽力したのも、それ故であるが、何としても、和文脈ではない、さりとて漢文脈とも云い難い、一種独特のジャーナリスティックな文体を創造したことが、彼の著作が広く伝播した要因の一つである。しかしながら福沢のこの成功は、彼の文章が古典的教養を身に付けた知識人にも受け入れられた、という点を落としては考えられない。もし福沢の文章が、文章の価値自体に於て、知識人に否定され、彼等のうちに抵抗を呼び起こしたとしたならば、彼の活動はあのように円滑にはいかなかったであろうし、ましてや、その著作、例えば「學問のすゝめ」が増刷又増刷、遂には七十万冊に達したということなどは考えられなかったであろう。福沢がこのような文体の創造に成功したこと、又その文章が知識人にも受容されたことは、日本には古

典的散文の規範というものが、歴史的な型としては存在しなかったことを意味する。

中国に於ては、文章の価値は屢々内容に先行する。云い換えれば、文章としての価値がないものは、思想的にも未完成なものであり、従つて当然それは普及力を持たない、とする。「言之無文、行而不遠」⁽²¹⁾の伝統的な觀念が尊重され、文人は文章の彫琢にこそ、最大の労力を払った。四字句を基調とし、対句的表現を好み、平仄を顧慮し、出典のある言葉を重ねる独特の修辭性も生まれてくる。しかも、古典的散文を綴り得ることが、読書人の資格として第一に要請されることであつた。

従つて、知識人を対象にして、外国の文献を翻訳することは、單に語学力に秀でているだけではない仕事である。原典を、読書人に受け入れられるに足る散文に書き直す、その表現力が要求された。海外生活を経験し、外国語に堪能であり、西欧の學問を學び、且つ伝統的思想にも理解が深く、その上古典的文章をも充分に綴り得ること、嚴復はそれらの条件を満たし得る数少ない人物の一人であつた。又彼自身、そのことに於て選ばれた人間であることを意識していたし、更に己がうちに持てるものを、對社会的に顯わすことなく埋もれることは、一身の不遇というに止まらず、大にして云えば國家約損失であるときえ感じていたと思われる。そしてそこに、自己の理想を具現化し、國家を先導する役割を果たそうとする、伝統的な中國知識人の意識が強く流れていたと考える。もし逆に、彼が中國の古書を読まない人々にこそ直接訴え、彼等を啓發することに自己の役割を見出したとするならば、彼等が容易に読むことのできる文体を創造しなくてはならない。然しそれは自己の文章を捨て去ることであり、文章觀の變革となり、更に知識人としての根底的な自己改造を迫られることになる。彼に於て、このようなことは考えられなかった。嚴復は、自己否定そのものを軸にして生まれていく型の思想家ではなかったのである。

こゝで嚴復の文章についての發言をみてみる。「嚴幾道与熊純如書札」⁽²²⁾に於て、彼は次のように述べている。「今夫れ文字語言の優美をなす所以のものは、其の名辭の富有を以て之を手口に著はし、以て奧妙精深の理想を導達し、奇異美麗の物態を狀写すること有るのみ。——詩の善く情を述ぶるもの、杜子美の『北征』に若くなく、能く物を狀するもの、韓吏部の『南山』に若くはなし、設ひ白話を用ふるも、則ち高きものは『水滸』『紅樓』に過ぎず、下きものは、將に戯曲中の皮黃の脚本と同じからんとす。就令、此を以て教育

し、普及に易くも、周鼎を遺棄し、此の康瓠を宝とするは、正に退化を如何とするなきのみ。須く此の事の全く天演に属するを知るべし。革命の時代、学説万千、然して之を人間に施すに優者自ら存し、劣者自ら敗る。千の陣独秀、万の胡適、錢玄同と雖も、豈に能く其の柄を劫はんや。則ち亦、春鳥秋虫の其の自ら鳴き、自ら止むを聴きて可なるが如きのみ。林琴南輩之と論を較ぶるに、亦笑ふべきなり。」白話運動を否定したものであるが、これは「英文漢語序」の「心声は天籟の自然に発するにして、必ず人有りて能く之が律令を為すにあらず。」という考えに裏打ちされており、又、前の文には進化論の皮相な援用が見られる。かくして前に引用した「与新民叢報記者論訳事書」に云う如く、司馬遷・韓愈の文こそ、伝わるべくして今日に遺っていると主張する。——以上述べ来たところ、厳復が知識人を対象にし、文言を以て翻訳を行なおうとした所以である。唯、彼の文章論は大難把なものであって、肌理細かなものではない。

扱て、翻訳の第一著「天演論」の「訳例言」に於て、厳復はかの有名な翻訳文の三つの標準、即ち「信」「達」「雅」を提示する。

「訳事三難、信・達・雅。其の信を求めること己に大いに難し。信を顧みて達せずんば、訳すと雖も猶訳せざるが如きなり。則ち達は尚し。——訳文は深義を明らかにするを取む、故に詞句の間、時に偏到附益する所有り。字比句次に斤々せざるも、而も意義は則ち本文に倍かず。題して曰く達旨と。筆訳と言はず、發揮せんことを取むるにして、実は正法にあらず。什法師言へる有り、『我を学ぶは病。』来者方に多からん。幸いにも是の書を以て口実となすなかれ。——『易』曰く『修辭立誠。』子曰く『辞達而已。』又曰く『言之無文、行而不遠。』三者乃ち文章正軌にして亦即ち訳事の楷模たり。故に信、達而外、其の爾雅を求む。此れ僅かに遠くに行はるゝを期するのみならず。実は則ち精理微言、漢以前の字法、句法を用ふれば、則ち達を為すこと易く、近世利俗の文字を用ふれば則ち達すること難し。往々義を抑へ詞に就かば、毫釐も千里となる。斯の二者の間に審択するは、夫れ固り己むを得ざる所有り。豈に奇を釣らんや。」

論理の積み重ねに依つて構築された西欧の思想家の著述を、暗示性と簡潔な表現を尊ぶ中国の古典文に翻訳することは、瞿秋白の指摘を待つまでもなく、それ自体非常な難事である。しかも「信」を踏まえた上で、あくまで「雅」に依つて「達」を得ようとするれば、

当然「僨到附益を避けず。」の結果となる。「行文爾雅を求めんと欲すれば、闕入すべからざるの字有り、改竄すれば則ち真を失ひ、任に因らば則ち潔を傷く。」の矛盾に苛まれた嚴復は、「⁽²⁴⁾原富」以後の翻訳に於ては、「信」の方を重ずるようになる。「是の訳と天演論とは同じからず。下筆の頃、全節文理に於て融會貫通之を為さざることを能はずと雖も、然し辭義の間に於て僨到附益する所なし。」（「原富」訳事例言）。しかしながら、それでも尚「羣己權界論」訳凡例には、「原書の文理頗る深く、意繁句重、若し文に依りて訳を作さば、必ず解を索むるに至難の人あらん。故に略して僨到を為さざるを得ず。此れ中文を以て西書を訳する定法なり。」と規定し、遂には「西人の文法、本中国と迥かに殊なる。——海内吾が訳を読むもの、往々にして猝解すべからざるを以て其の艱深なるを嘗る。原書の難、且に実之に過ぎんとするを知らず、理本奥衍、不佞の文字と固り渉るなきなり。」と弁解まで試みている。彼が訳著の殆どに、自序、例言、凡例、贅語などを記し又文中屢々案語を挿入し解説を試みているのは、一つには自己の訳文の疎漏ならんこと、即ち「信」からの逸脱を補おうとする意図が働いていたとも考えられる。⁽²⁵⁾

四

嚴復の翻訳文そのものについての検討は、後日稿を改めるつもりであるが、彼が「行文爾雅」を求めたのは、その文章傾向が桐城派の流れを汲むものであったが故である。「為文之方」を「文人能事」とし、文は雅潔であらねばならぬ、という桐城派に共通する文論を、嚴復はその作文態度としていたと考える。——但し後述するが、その文芸観に於ては桐城派、特に姚鼐などの主張とは異なった考えを述べている。——しかしながら、嚴復の政論の文章を、私はさほど高くは評価し得ない感を抱いている。彼の文章構成の特徴としては、部分／＼客の問いに反論するという問答体を用いていること、屢々四書五経や先秦諸子、漢代史家の著作や言を引用していること——就中、その引用に於ては、易経、論語、孟子及び老莊、それに史記や漢書などが多い——又、四字句を文の軸に据え、对句的表現を用いる好みがあることなどが目に付く。特に、出典のある言葉を使用する上に於ては、多大の苦心を払っているように察せられるのであるが、それに依って、彼自身の文が活かされているかと云うと、寧ろその引用句のうちに埋没してしまつて、先哲の言の正当さを

論証するような結果になっている部分があるのは、由緒ある言葉を引用する、但し陳腐であつてはならない、とする古文家の考えに照らした場合でも欠点として指摘されよう。又文脈指示語や否定辞の管到が不明確であつたり、云い切る時の文の「すわり」が悪いことなどが目に付く。

「曩甲午之辦海防也、水底磁雷与開花彈子、有以鉄滓沙泥代火藥者、洋報議論、謂吾民以数金鎗銖之利、雖使其国破軍殺將失地喪師不顧、則中国今日之敗衄、他日之危亡、不可謂為不幸矣。此其事足使聞者髮指、顧何待言！然諸君亦嘗循其本而為求其所以然之故与？」（「原強」）一例ではあるが、これなども齒切れのよい文とは云い難い。章炳麟は「氣體制舉に比す。」（「与人論文書」）「未だ帖括を離れざるがごとし。」（「社会通詮商兌」）と批判の言葉を投げ懸けている。

論文に見られる多少の文章上の欠点を、私は、根本的には彼の思想的未熟さ乃至は不徹底さの頭われであると考ええる。嚴復は清末に於て、ヨーロッパの科学技術の根底には中国とは異質の思想があることに気付いた、少数の中国人のうちの一人である。彼が最も衝撃を受けたのは、その自由の思想と科学的合理的精神であつた。唯、彼はその驚きが深かつただけに、中国に於てもそれらを消化し得る基盤があるかどうかの模索を始めた。そしてその模索は、それを受け入れるのに障害となるものを排除する形で始められた。前記四編の論文はその意図に基づいて書かれている。確かに彼は様々な障害を暴いていった。しかしながら、それは同時に彼自身に於ける精神の変革であらねばならなかつた。積弊は自己の内部に於て暴いていく形で始められねばならなかつた筈である。しかし彼はその内部否定には到達しなかつた。東西文明の優れた解説者であつても、自己否定そのものを軸にして生まれ變つていく思想家にはなり得なかつたのである。そうした不徹底さから来る一種の混乱が、これらの文章に現われていると思う。又表現技術の点から云えば、嚴復が詩文の道の師を持たなかつた人であること、従つて先人の範を追いつゝ、若い頃から一途に文章の修業を積んだという人ではなく、独力で自己流に文体を作りあげていった為に、その云わば我流の弱点が露呈されていると思われる。

次に嚴復の詩について。先にも指摘した如く彼はイギリス留学から帰国後長らく不遇な時代を過ごし、又後に西欧思想紹介の第一人者として名声を博しながら、戊戌政変に遭遇し、以後革命派にも保守派にも与し得ずして、悶々たる時を過ごすのであるが、正にそう

した不満の情と鬱々たる心と、政変の犠牲者を悼む沈痛なる想いなどを反映した幾編かの詩を遺している。

哭林晚翠（抄）

相見及長別、都来幾晝昏、
池荷清道暑、叢桂遠招魂。
投分欣傾蓋、湛冤痛復盆。

贈高嘯桐（抄）

連峯苦旱潦、今年災害尤、
揚子流域間、万衆生魚頭。
豈伊天運乖、人事誠未修。

秋花次呂女士韻（抄）

秋花趁暖開紅紫、海棠著雨嬌難起、
負將尤物未吟詩、長笑成都浣花里。
綠章乞蔭通高旻、劍南先生情最真。

その他、「送沈濤園備兵淮揚」「和寄朝鮮金沢采」「再題惜別図」「贈林畏廬」などの諸編は、彼の遺した詩のうちで、その結構に於て比較的見るべきところがある。古体の詩の方ができがよいと思うが、然し、私は嚴復の詩を通読して、彼を詩人として分析する意欲は湧いて来なかった。詩語の魅力に乏しい。

彼は詩をどのように考えていたか。「以漁洋精華錄寄琥唐山春楡侍郎有詩見述率賦奉答」に於て王漁洋を高く評価しつつ、「西昆靡靡江西粗、公安竟陵更麼麼。」なりとして退けた嚴復は、「清新俊逸殆天授、着眼沉郁兼頓挫。」と述べて、天性の閃きの他、学問に裏打ちされた内容の深さと音節の抑揚とを詩に求めた。又「説詩用琥韻」では「昔者魯東家、太息『閔雎』乱。」として正声を崇び、靡靡の音を

否定し、敢て唐詩とか宋詩とか限定して学ぶことはない、詩は天性と学力とに依つて個性を表わすものだとし、釈迦が靈鷲山で一花を衆に示した故事を踏まえて「捻花示微旨、悟者一笑粲。」に詩の本質があるとする。しかしながら、嚴復は詩の効用については奇妙な論を展開する。即ち「詩蘆說」⁽²⁹⁾に次のように言う。「嗟夫、詩は至つて両間無用のものなり。飢ゑたる者は之を得るも以て飽を爲すべからず、寒き者は之を挟むも以て温を爲すべからず、国の弱きは詩を以て強ならず、世の乱れは詩を以て治まらず。——無用なりと雖も、大地は生民より以來詩歌に至りては則ち有らざるなし。——詩の独り貴き所以の者は、其の用ふべき所なきを以てにあらざるや。用ふべき所なきもの、用有らしむべからず、用ふれば則ち其の真を失ふこと甚し。」と。文芸についての似たような見解は、初期の論文「救亡決論」、及び「古今文鈔序」⁽³⁰⁾（一九一〇年）のうちにも散見される。先ず「原強」に於て、西洋の學問は「物理を先にし、文詞を後にし、達用を重んじ藻飾を薄く」するが、それに対して中国はどうか、「中土の學必ず古訓を求む、——詞章を記誦すること既に誤れり、訓詁注疏又甚しく拘る。江河日下り、以て今日の經義八股に至りては則ち以て人才を破壊するに足る。」として八股文を否定した嚴復は、「救亡決論」では更に進めて、「独り人才を破壊するの八股宜しく除くべきのみならず、凡そ宋學、漢學、詞章の小道と皆宜しく且に高閣に束ねんとすればなり。——夫の詞章の一道の若きはもと經濟と科を殊にし、放達するを妨げず。故に蜃樓海市、惛迷離を極むと雖も、皆情を移し、意を遣るに足る。一たび事功に及びては則ち淫遁詖邪、其の心に生じ、其の政に害あり。」と述べている。

中国の學問が非実用的であつて社會の進歩に役立たないと論断し、創造的な精神を奪うものとして八股文を鋭く批判し、読書人の勉強態度そのものを否定しようとした、そのあまりであるとは云え、宋學の義理、漢學の考拠、及び詞章を、束ねて棚に置いて用いないのだとし、文芸を経世済民の問題と切り離し、しかも事功に害有りとする彼の見解は、桐城派、特に義理・考拠・詞章の合一を求めた姚鼐の考えなどとは、かなり隔つたものがある。嚴復は一般には桐城派の系統に属する人として考えられているが、右の論点からすると、これは当然問題がある。彼の文章傾向、又散文の規範を秦漢、唐代の散文に求めた点及び呉汝綸との關係などからするならば首肯できるが、文芸觀の点からみると、桐城派とは異質なものが出てくる。唯、こうした問題が從來余り顧みられなかったのは、彼の文章

論や文芸観が肌理細かなものでなく、又方苞以後の散文家に対する発言が殆ど見られない為に、具体的に論証するのが困難であったこと、又桐城派と云つても、一概には規定し得ず、三祖の考えに於ても異なつた点があり、道光・咸豊以後に至つては解体の要素を見せられているので、嚴復の考えをそれらとつき合せて論ずることに、更に困難さが加わつたが故であると思う。明・清の散文家の文章は八股文と一脈通じている点があるので、嚴復がたゞ概念的に秦漢・唐代の散文を範とするだけでなく、八股文を否定した問題意識を更に深めて、清代散文家の文章自体を精密に論ずる方向にいったとするならば、彼の文章論、文芸観はもっと生彩あるものになつたと思われるし、又彼の文章そのものも変化を来たしたと考えられる。尠くとも、前述の如く、章炳麟から「未だ帖括を離れざるがごとし。」と簡単に批判されてしまう矛盾を露呈することはなかったのではないか。

「古今文鈔序」に於ては、「夫の古の文辞を治め、遂に其の極に至る若き者、以て見るべきのみ。豈に意、憤懣する所有りて以為く、必ず是れを待ちて而る後に以て自ら通ずるもの有るにあらずや。古と徒となり、冥然独往し、世の向背する所に関はらざるものにあらずや。」と述べている。「詩廬説」や「救亡決論」と同様な意見である。「古の文辞」に対する誤つた見解であるが、一方で読書人の勉強態度を批判しながら、自らは「冥然独往、世の向背する所に関はらず。」とするところにも、彼の矛盾した考えが伺える。従つて、「救亡決論」の「詞章は事功に益なし。」とする考えと共に、嚴復は文芸を啓蒙の手段として活用するようなことには当然反対する。梁啓超の「訳印政治小説序」「論小説与羣治之關係」⁽³¹⁾に見られるような柔軟な考え方——功利的文学観ではあるが——を、嚴復は持ち合わせてはいなかった。

猶、阿英は「晚清小説史」に、一八九七年十一月十五日付「⁽³²⁾國聞報」紙上に著者未署名のまゝ、凡そ一万語に及ぶ「本館附印小説緣起」⁽³³⁾と題して掲載された評論を、嚴復・夏曾佑の合作になるものとしてしている。これは、何が文芸作品、特に小説の主題となるか、どういふ作品が何故に今日迄読みつがれて来たのか、ということを描いたものであるが、要約すると、——思うに人類の歴史は争亂の歴史であつた。そして強力なものが残つた、そこから強力な英雄が出現した。但しルッター、ベーコン、コペルニクス、ニュートン、ダーウィン等が現われて鴻濛を開闢して以来、「血氣」の世界から「腦氣」の世界に變つて来た。又、人類がその子孫を遺す為に男女両性

が存在している。従って人類の「公性情」は英雄と男女の情であると云えよう。こゝから「駭・愕・泣・歌」の感情が表現され、後世に流伝していくことになる。唯、今日に伝わる作品をみると、そこに使われた言語文字が後世の人々に受取られていった、即ち口語に近い表現がなされている。細部までよく描けてある。人々が経験的に判断し得る内容が表現してある。虚事が描かれてある。以上の点が共通しており、これが文芸作品の伝わる所以である。具体的には、「三国演義」「水滸伝」「長生殿伝奇」「西廂記」「臨川四夢」等の作品が挙げられよう。欧米・日本は其の開化の時、往々にして小説の助けを得た。そこで我々は外国のものを訳し、珍しいものを付け加え民を開化させたい、小説は正史の根となるものである。

大体以上のような見解を述べたものである。このうち、人類の歴史を説明した部分などは、嚴復の考えとして納得いくのであるが、後半、全文の三分の一程度を占める小説、戯曲に関する意見は、嚴復の文芸観や俗文学に対する見解からしても、この部分が、直接彼の筆になる、或はこゝに嚴復の考えが十全に表われている、とするにはやゝ疑問を感じるのである。合作がどの程度のものであるのか、現在のところ裏付ける資料に乏しく、論証は後日の課題としたい。たゞ、従来は梁啓超が初めて小説の功用を説いたとされているが、右の一文はそれより一步先んじており、歴史的な意味を持つものと云えよう。

嚴復は従来、思想的にのみ評価されており——もともと細部に互つての研究は未だなされていない。これは清末に於ける改良主義の研究が全般的に遅れていることとも関連するが——文学史的観点からは余り顧みられていない。これは彼の業績から考えれば当然のことゝは思えるが、しかし嚴復の全貌を把握するには、その視点だけでは不十分である。文中述べた如く、彼が翻訳文、表現技法、又詩文等についても一言を持った散文家であつただけに、そうした面からの考察も必要とされる。拙稿に於て、若干の問題を提示したつもりであるが、今後は彼の翻訳文とその歴史的評価の問題を中心に、更に文学史的位置付けを深めていきたいと考えている。

註1 梁啓超「戊戌政変記」第一篇「改革実情」に「我支那四千余年之大夢之喚醒、実自甲午戰敗割台湾償二百兆以後始也。」

2 一八九八年一月、嚴復は「国聞報」に「上今上皇帝万言書」を発表、「研各国之歡・結百姓之心・破把持之局」の三つのスローガンを提出した。

3 魯迅「朝花夕拾・瑣記」「熱風——随感錄二十五」・胡適「四十自述」等の諸文に明らかである。

4 王拭「嚴復伝」

5 いづれも嚴復が一八九二年、四十才の時に作った詩「送陳彤直帰國」中の句。「嚴復詩文選」載。

6 宋の陸九淵と明の王守仁の学説。嚴復は「陸王之学」を最も激しく攻撃し、「夫陸王之学、質而言之、則直師心自用而已。」（『救亡決論』）と云う。即ち極めて独断的、先験的で自己の才知を恃んで万事を処理し、人の言を入れない、と否定し、更に実証的な精神に欠け、民生に益なく、現実に背理していると指摘する。

7 張之洞は屠守仁に意を授けて「辨聞韓書」を書かして「時務報」に発表。「今『韓韓』者溺于異学、純任胸臆、義理則以是為非、文辭則以辞害意、乖戾矛盾之端、不勝枚舉。」と攻撃した。

8 譚嗣同（一八六五—一八九八）の「仁学」は、一八九六年に成ったと思われるが、彼の生前には発表されていない。——梁啓超の手に依って日本で出版された。

9 王拭「嚴復伝」に拠れば、これは露清秘密条約（一八九六年）後に発表され、嚴復は外交上ロシアと關係を持つとしただけでなく、内政面に於てもロシアに倣おうとし、君主立憲に反対し右傾的傾向を示した、とある。この文は「嚴復詩文選」には採録されておらず、全文を見ることができなかつた。

10 「嚴復訳『天演論』」的時候、本来算激烈派。聽說他常常說『尊民叛君、尊今叛古』八個字的主義、後來他看得激烈的多了、反有点偏于保守的様子。他在民國紀元前九年、把他四年前旧訳穆勒的 On Liberty 特避去、自由二字、名作『羣己權界論』。

11 「然則及今而棄吾君臣可乎？」曰、是大不可。何則？其時未至、其俗未成、其民不足以自治也。」

12 王拭「嚴復伝」の引用文に拠る。

13 「飲冰室文集卷四」/与嚴幼陵先生書

14 求治翻為罪、明時誤愛才、伏尸名士賤、称疾詔書哀、燕市天如晦、宣南雨又来。臨河鳴憤嘆、莫遣寸心灰。

15 「原富」訳事例言

16 訳「羣学肆言」序

17 「羣己權界論」訳者序

18 「孟德斯鳩法意」孟德斯鳩列伝

19 「穆勒約翰名字」第二節

20 この一文は「新民叢報」第七号に掲載されたものであるが、後に「与梁任公論所訳原富書」と改められている。「嚴復詩文選」にもこの編名で採られている。

21 「左伝」襄公三十五年「仲尼日、志有之、言以足志、文以足言、不言、誰知其志、言之無文、行而不遠。」

22 「嚴幾道与熊純如書札」はいづれも「学衡」誌に掲載されている。本文は第二十期。

23 一九〇三年、嚴復が学生熊季廉の請を受けて作ったもの。漢語を用いて解説した英文の文法書。English Grammar Explained in Chinese.

24 吳汝綸宛ての書簡。

52 嚴復の訳業については、魯迅（主として「二心集」に於ける瞿秋白との往復書簡）・瞿秋白（魯迅宛ての書簡は全文「二心集」にあり、魯迅に

26 えた返書は「瞿秋白文集第三卷・再論翻訳」・胡適（中国新文学大系・建設理論集導言）などがそれ／＼歴史的評価乃至批判を下しており、纏

27 まった論文としては、賀麟「嚴復的翻訳」（中国近代出版史料）第二編に刪録）がある。

28 桐城派最後の文人である吳汝綸との関係——即ち「不佞往者每訳脱稿、輒以示桐城吳先生。」として、「天演論」「原富」などに序文を乞い、屢々

29 往復書簡を交わして訳業の助言を受け、呉も又「自中土譯訳西書以来、無此鴻製、匪直天演之学、在中国爲初鑿鴻濛、亦緣自来訳手、無似此高文

30 雄筆也。」として高く評価していたことなど——はよく知られているところであるが、これとて師弟の間柄とは云い難い。吳汝綸死後、嚴復は「平

31 生風義兼師友、天下英雄惟使君。」と悼んでいる。

32 錢基博「現代中国文学史」には「雜文散見、不自留副、僅存詩三百余首。」とある。

33 「伝燈録」——釈迦於靈山会上、手拈一花示衆。

34 「嚴復詩文選」——嚴復給胡梓方的詩廬作「詩廬説」。

35 「涵芬楼古今文鈔」とも云う。涵芬楼は商務印書館の上海開北にある蔵書楼。「古今文鈔」は呉曾祺（福建閩侯の人、商務印書館編輯）が涵芬楼

36 蔵書中の文章を編選したもの。嚴復はこれに序を寄せた。一九一〇年。

37 「訳訳政治小説序」は一九八八年戊戌政変の爲日本に亡命した梁啓超が、横浜で発行した「清議報」の創刊号に書いたもので、後に「住人之奇遇」（東海散士）翻訳本の序文にも利用されている。「論小説与羣治之關係」は、同じく梁啓超が一九〇二年、日本で創刊した「新小説」の巻頭に発表

38 したもの。

39 一九七七年十一月、嚴復は王修植・夏曾佑等と共に天津で「国聞報」を創刊した。これは、梁啓超が一九六六年上海で創刊した「時務報」と共に

40 変法維新の思想を宣伝する有力な新聞であった。この「国聞報縁起」も嚴復の筆になるもの。これに「本館所報之例、大要有二、一、翻訳、一、

41 採訪。」とあるが、政変後、一九八八年十二月に停刊させられた。

42 「本館附印小説縁起」は、「中国出版史料補編」に「本館附印説部縁起」として採録されている。

43 嚴復の友人。清末の思想家。古代史及び仏教学に独自の見解を示した。「嚴復伝」に拠ると、嚴復は彼を「穂卿（夏曾佑）学識甚高、而于佛学尤

44 達。自厌心世事以来、日惟縱酒、每至爛醉潑地、朋友每以衛生爲言、而穂卿不之恤也。」と哀惜している。猶、夏曾佑については、島田虔次著「中

45 国革命の先駆者たち」（筑摩書房）に詳しい。